

ポーランド

下巻

ジェイムズ・A・ミッチェナー

工藤幸雄 訳

Poland

James A. Michener

文藝春秋

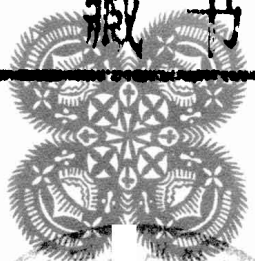
ポーランド

下巻

ジェイムズ・A・ミッチェナー

王藤幸雄 訳

江苏工业学院图书馆
藏书章



POLAND
BY JAMES A. MICHENER
COPYRIGHT © 1983 BY JAMES A. MICHENER
CARTOGRAPHY © 1983 BY JEAN PAUL TREMBLAY
JAPANESE TRANSLATION RIGHTS RESERVED BY BUNGEISHUNJU LTD.
BY ARRANGEMENT WITH WILLIAM MORRIS AGENCY INC., NEW YORK
THROUGH TUTTLE-MORI AGENCY, INC., TOKYO
PRINTED IN JAPAN

ポーランド 下

一九八九年一月二五日第一刷

一九九〇年三月一〇日第二刷

著者 ジェイムズ・A・ミッチェナー

訳者 工藤幸雄

発行者 豊田健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三

電話 〇三―二六五―二二二一

印刷所 凸版印刷

製本所 矢嶋製本

万一落丁乱丁があればお取替えします

ISBN4―16―31470―X

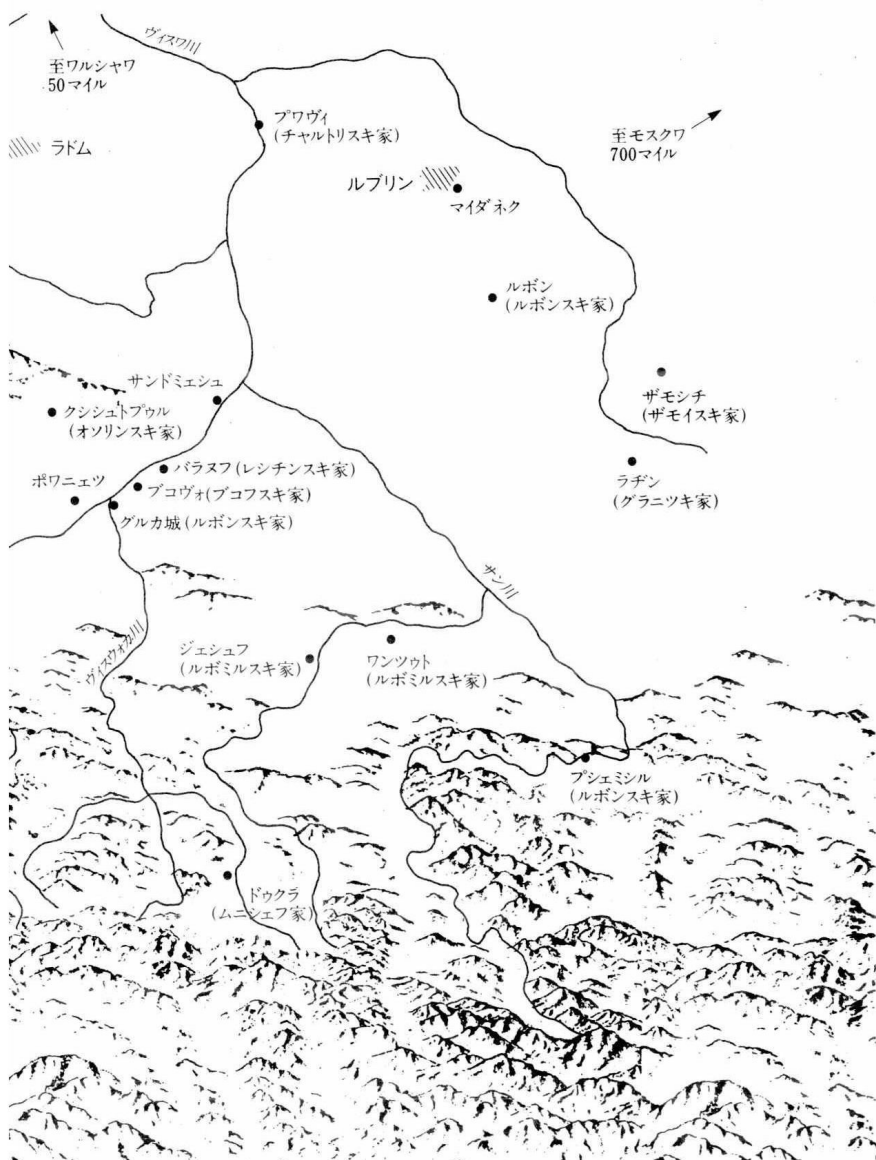
ポーランド

下巻



Applied from the map drawn by J. P. Tremblay





物語の舞台

0 20 40マイル
0 20 40キロ

チェンストホヴァ

キェルツェ

至ベルリン
275マイル

カトヴィツェ

クラクフ

ヴァイス川

タルヌフ

● オンフィエンチム
(アウシュヴィッツ)

● ヴィシニチ
(ルボミルスキ家)

● ニエチツァ
(ムニシェフ家)

至ウィーン
175マイル



装幀
坂田政則

下巻目次

VII マズルカ 9

VIII 砕かれた夢 143

IX 暴虐 231

X 再びブック vs. ブコフスキ 405

訳者あとがき 478

本書を楽しむために

一、これは「ポーランド」を主題にアメリカ人が書いた長篇小説を日本語にしたものです。物語は、初めと終りが危機の年一九八一年であるほかは十三世紀から二十世紀までの各時代に、この国に起きたドラマを生々しく描き出します。

二、主な主人公となるのは、同じ村に代々、暮しつづける三家族、ルボンスキ家、ブコフスキ家、それとブク家。家の格式は、この順序に、上流の貴族（のち伯爵）、下級の貴族、そして水呑み百姓です。

これらの家名もブコヴォ村も、もちろんフィクションですが、事件や人物の多くは史実を踏まえています。読み進むうちに、読者は歴史または物語の大きな流れに身を置くことになります。

三、訳者の考えで補った個所があります。その個所は「」で挟んで示しました。目うるさければ、飛ばしても構いません。原著者のちょっとした思い違い

（例えば「ポルカ」がポーランドの伝統音楽である）もそこで指摘しました。

四、ポーランドの苗字は男と女によって区別されることがあります。例えばルボンスキ家の夫人や令嬢が「ルボンスカ」なら、ブコフスキも同様に「ブコフスカ」となる。また、ヤドヴィガという女性の名は愛称ではヤーチャなどになります。どうか惑わされないように。

五、タタール族の侵攻をテーマにした、第二章「東方からの敵」では日本式の度量衡の単位を用いました。時代・場所との違和感を抑え、古い感じを出したいと考えたからです。それ以外では、マイル（約一・六〇九キロメートル）などを原著のまま用いました。

六、日本語の表記についても、多少わがままを通しました。「まづ」「づつ」に見られる「づ」の多用、また「終る」「変る」「起る」「代り」の送りがない省略、「込」という国字は使わない、その他です。すぐに慣れてくださるといいのですが……。 （訳者）

VII マズルカ



盛装の貴婦人たち

主な登場人物

アンジェイ・ルボンスキ……オーストリア・ハンガリー帝国閣僚
カタジーナ……アンジェイの妻
フランツ・ヨーゼフ一世……オーストリア・ハンガリー帝国皇帝
ヴィクトル・ブコフスキ……役人
ビリッチ……バーナト人
ヘンツラー……音楽批評家
クリステイナ・シュプロト……ピアノリスト
オスカー・ツリリング……アメリカ大使
マージョリ・ツリリング……オスカーの娘
ヤンコ・ブウク……農夫
ヤドヴィガ（ヤーチャ）……ヤンコの妻
「おばさん」……ブコフスキ家遠縁の寡婦

一八九五年、クリスマスの二日前、午後もまだ早い時間、年のころ四十半ば、瘦せて長身の紳士が、大型蒸気船から降り立った。船はブダペストからドナウ川を遡^{さかのぼ}って今しがたウィーンに着いたばかりである。爵位を持ち、オーストリア・ハンガリー帝国政府閣僚の肩書のある紳士は、河港では特別扱いだった。川の支流として市街の中央まで掘られた運河に入ってスピードを落とした船が波止場に横づけになると、この紳士が真っ先にタラップを降り、あとの船客はしばらく甲板に残された。折から降りつる雪が冷たい川風に強く吹きつけ、紳士の毛皮帽子も重たげな毛皮コートも、見る見る白くなった。強風が、そのコート裾をひるがえすたびに、紳士はわずかに顔をしかめた。品のいいスラヴ風の顔立ちには、どこことなく威厳が具わっていた。

この人物の名はアンジェイ・ルボンスキ、伯爵で少数民族相の要職にある。大臣としてブダペストでの重大な交渉を終え、帝国の首都へ戻ったところである。

独立要求のマジヤール（ハンガリー）人の運動の激しさに押されたオーストリアは、対プロイセン戦争に敗れた翌一八六七年、いわゆるアウスグライヒ（妥協）によりオーストリア皇帝が国王を兼ねる「ハンガリー王国」の発足を認めて「二重帝国」とし、軍事・外交を除いて自治権を得たマジヤール人貴族の意気は揚がった。だが、勢いに乗った民族主義者の不穏な動きがすべて収まったわけではない。帝国領内の少数民族の総人口は千三百五十万、うちマジヤール人は六百万、その反

抗の激しさに、少数民族相という職掌柄、ルボンスキは心労が絶えない。

こんどの交渉も難航が予想された。それを乗り切れたのはルボンスキの冷静な判断力に加えて、少数民族への温かい理解が相手側に通じた結果と思われた。これは随員一同の一致した意見である。交渉は成功して、当面の宥和に漕ぎつけた。ルボンスキ自身にも自負するところはむろんあった。皇帝陛下への奏上をさっそくにも仰せつかるにちがいない——そう思うと、雪の中の顔も綻ぶようである。つくづく手強い相手であった。いつだって彼らは「オール・オア・ナッシング」で強硬に食いがつてくる。一步も譲歩しようとしなない。伯爵は重苦しかった会談の様子をきれぎれに思い浮かべた。顔をしかめるように見えたのは、そんな折であったのかもしれない。

彼らも彼らなりに愛国者なのだ、時には激越にすぎるほどだが、おれは、おれなりに彼らの愛国心を評価する、この共感を公然と世間に見せるのも悪くはあるまい——伯爵はひそかに思った。

重任を果たしての帰国にしては、省からの出迎えはない。代りに波止場には、伯爵家の使用人がふたりお仕着せ姿で迎えにきていた。お抱えの馭者と従者は、金色の紋章の光る灰色に塗った馬車まで伯爵を畏まって案内してから、主人の荷物や膨らんだかばんを船室つきの給仕から受け取り、屋根に運び上げると、馭者台に並んだ。二頭立ての馬は美しい葦毛の馬でリピツァ（現ユーゴスラヴィア領）にある有名なオーストリア帝室牧場の産である。船の発着所に配備された警官らは、伯爵家の箱馬車と気づき、姿勢を正して敬意を表した。

リピツァの帝室育馬院の鞍馬は定評がある。だから、地方出身の政治家志望の野心家どもは、ひとたびウィーンに出ると、この馬ばかりで無理にも四頭、ときには六頭立てを組んで、これ見よがしに街を練った。そんな連中は、クロアチアとかチロルの出身者に多かったが、たちまち成金と見透かされて、恥をかくのが落ちであった。新興成金を意味するフランス語 *nouveau riche* が、ちかごろウィーン市民のあいだにも流行して、そう目された人々は（多少の羨望を秘めながらではあ

ったが、物笑いの種となった。

ガリツィア地方と呼ばれるオーストリア領ポーランドで一、二を争う資産家の伯爵が、その氣になれば、リピツア産の馬の一ダースや二ダースを持つのは容易なことではあったが、それほどの贅沢は皇室ご一族に限るがよい——というのが彼の考え方だった。とは言え、伯爵の厩には他の三台の箱馬車に似合う二頭立ての三組がちゃんと揃っていて、出仕のたび伯爵は密かな満足感を味わった。この瞬間も、その得意な氣持が言えない。もともと伯爵のこうした貴族趣味も、あと十年を経ずして流行の自動車へと切り替るのだが……。

「リングシュトラッセ」駟者が手綱を取り上げるなり伯爵は言った。それは従僕が戻ってきて、防寒用の熊皮を丹念に伯爵のまわりに着せ終った直後である。馬は雪を蹴って敷石の道に蹄の音を立てた。運河沿いに走った馬車は、間もなく旧市街を取りまく大通りに乗り入れて行く。

一八五七年と言えば三十八年を遡る昔だが、皇帝フランツ・ヨーゼフ一世は、勅令を下し、ウィーンの城壁の取り壊しを命じた。同時に城壁と周辺の郊外を隔てる歴史に名高い斜堤も廃して、これを並木の立つ広々とした大通りに変えることにした。新開の道の両側には堂々たる官庁が軒を連ねる計画である。ほとんど一千年にもなんなんとする由緒ある城壁をむぎむぎと取り壊すとは——主だった考古学者・歴史学者のいくにんかが反対に立った。「われわれの先祖がいかに生きたか、その教えを伝える誇り高い都市の姿は永遠に子孫に残すべきである。城壁には手をつけず、首都の発展は斜堤の向う側に求めることが望ましい」と彼らは主張した。皇帝は突っぱねた。

壮大な計画の完成まではほぼ四半世紀を要した。ウィーンは、もはや往年のウィーンではない。中世を偲ばせる古風蒼然たる城郭は跡かたなく消え、代って緑豊かな並木道の街路が次つぎに四通八達した。こうしてウィーンには新たな風格が具わった。フランスから戻った旅行者に言わせると、「パリのほうがはるかに壮観だね」となるのだが、ナポレオン麾下の將軍たちの名を冠するパリの

大通りは確かに立派ではあつても、ウィーンほどには市の中心部と結びつく機能を果たすとは言えず、そのうえ通りに櫛比する建築物もかなり見劣りすると、市の関係者は譲らなかつた。それには充分な根拠がある。

リングシュトラッセと呼ぶ環状道路に面して並ぶ建物には、いづれ劣らず大規模な博物館・美術館、カトリック教会、大学、劇場、市庁舎、国会議事堂、オペラハウスなどが妍を競つていた。この通りを往来することに、この場所こそ世界の中心だとの感慨がルボンスキの胸中をかすめる。きょうもまたそうであつた。その思いが伯爵の決意を新たにさせるのも、いつものことである……おれは、この比類ない首都を誇る国家に忠節を尽くそう、国務に励み、少数民族の和合に努めるのが、皇帝への忠勤だし、おれの父祖を見習うことにも通じる、そして今回、おれはおれなりの重責を果たしてきた……。

少数民族と言つても、広大な版図を擁するオーストリア帝国の場合、その構成は複雑多岐の一語に尽きる。なにしろ各種民族を数え挙げれば、四十にあまるほどであつた。マジヤールの強硬ぶりについては、すでに触れたが、もうひとつ彼らの有能さに敬意を払つておくのが、公平であろう。つぎにクロアチア人、これは内部対立が激しいから与しやすい。イタリア人、反抗をもつぱらとして他人の言うことを聞かない。自由を渴望しない民族は皆無にせよ、ルーマニア人は、その点で極端にすぎる。ボヘミア人、これさえいなければブラハの街はとくに平穏を取り戻しているはずである。スロヴァキア人も自治の要求に性急だ。スラヴにはまだ他にスロヴェニア人、ルテニア（ウクライナ）人、ボスニア人、モンテネグロ人がいるし、きわめて少数しか残らぬヴェンド人にしても、劣らず自信家なのに手を焼く。ウィーンの古名ウィンドボナやヴェネツィアの地名は彼らの民族名ヴェンドに由来するという。いわば旧欧州の支配者なのだ。被抑圧を自覚して無視できぬグループには、さらにシレジア（シロンスク）地方のドイツ人住民がある。こうして帝国内の随所から、